

中学校技術・家庭科の被服領域における 学習指導に関する調査研究

— 島根県の場合 —

多々納道子*・大島麻里**

Michiko TATANO Mari OOSHIMA
Guidance of Clothing Education in Junior High School
—the Case of Shimane Prefecture—

I. 目的

小学校、中学校および高等学校における被服教育は、豊かでよりよい衣生活を営む実践の能力を培うことを目指している。すなわち、児童・生徒の発達段階に応じて衣生活文化を伝達し、さらに新しい文化を創造できる能力の育成に寄与するものである。具体的には、児童・生徒の衣生活を対象にし、彼らが抱える生活課題の科学的な解決を通して、衣生活に関する基礎的な知識や技術の習得、および態度の育成を体系的に図ることにある。

したがって、被服教育においては、衣生活の実践過程が教育活動の対象として、あるいは教育内容を内包するものとして重要な意味を持っている。衣生活の実践は、「何故に着るか」「何を着るか」「いかにあつかうか」「いかに着るか」「いかに変わるか」などの目標を遂行する生活行動からなる。

被服教育は、この実践過程と深く関連するけれど、時代によって社会状況や衣生活の様相が変化し、また児童・生徒の発達段階に即応する必要があるなどの諸条件により、どの領域を指導するか、あるいはどこに重点をおくかということが全く異なってくる。

現行の技術・家庭科被服領域では、「生活に必要な技術を習得させ、それを通して家庭や社会における生活と技術との関係を理解させるとともに、工夫し創造する能力及び実践的な態度を育てる」という目標のもとに、〔被服1〕作業着の製作、〔被服2〕日常着の製作と被服整理、〔被服3〕休養着及び手芸品の製作によって内容が構成されている。

これらの内容を衣生活の実践過程に対応させてみる

と、中学校段階の被服教育は、「何を着るか」に関わる被服製作に重点があると理解できる。そのため、「いかに着るか」の生活課題を解決する着装については、衣生活の実践過程の中で大きなウェイトを占めているにもかかわらず、製作を通して指導するというように、位置づけられているにすぎない。

このように、被服製作重視の内容では、領域の男女相互乗入れの実践が極めて困難であるし、また製作を通して……というあいまいな位置づけによる着装的指導では、小・中・高の一貫性を欠き、着装的については時間が不足するので扱われなかったり、物作りのつけたしに終るなど軽視されていると、指導上の問題点が指摘されている。さらに、「家庭科の指導内容に関する意識調査」によると、家庭科指導主事と小・中・高の家庭科教師は、被服の8内容区分の中で、着装的指導は男女に対して、被服製作と比較してより必要性が高いと認知している。

したがって、これまで明らかにされている諸点を重ね合わせて考えると、中学校段階の被服教育は、新しい視点からその内容を検討していく必要があると思われる。

今後の被服教育のあり方としては、着装的指導を重視するのが望ましいと、考えられているにもかかわらず、実際には十分な指導がなされていない。そこで、今回は中学校の家庭科教師にアンケート調査を実施し、被服領域全体の指導上の問題点を調べ、特にその中でも着装的指導に重点をおき、被服領域におけるその望ましい指導のあり方について検討した。

II. 調査方法

調査対象は、島根県のすべての公立中学校の家庭科主

* 島根大学教育学部家政研究室

** 島根県立松江南高等学校

任120名で、有効回収数92名、有効回収率 76.7%であった。ただし、昭和58年7月の集中豪雨によって、学校の施設・設備に特に被害を受けた1校は除いた。

調査時期は、昭和58年9月上旬～10月上旬。

調査方法は、質問紙法で郵送調査による。

III. 結果および考察

1 被服領域の指導

技術・家庭科の被服領域を指導する場合、教師はどのような問題点を解決しなければならないかを把握するため、授業を成立させる上で必要な施設・設備、授業時数および指導内容などに関する調査を行った。

これらの中で施設・設備や授業時数に関して生じる問題点は、学校の規模によって異なると思われるので、学校規模別に集計した。

島根県における中学校の規模の実態をみると、5学級以下の小規模校が多く、19学級以上の大規模校は少ない。したがって、本調査では小規模校と中・大規模校の2つに分類したところ、小規模校44校、中・大規模校48校となった。

また、技術・家庭科の授業を編成している1学級の人数は、平均すると、小規模校13.8人、中・大規模校33.9人で2倍以上の差があった。

1) 施設・設備

①視聴覚機器

まず、視聴覚機器の設置状況について調査した。その結果は、表1に示される通りである。

表1 視聴覚機器の設置状況 (%)

学校規模		OHP	スライド 映写機	VTR	16ミリ 映写機
小規模校	あ な し	90.9 9.1	54.5 45.5	50.0 50.0	22.7 77.3
中・大 規模校	あ な し	97.9 2.1	62.5 37.5	47.9 52.1	22.9 77.1

OHPは、規模にかかわらず、ほとんどの学校に普及していた。スライド映写機とVTRについては、およそ半数の学校に普及していたが、16ミリ映写機は設置されていない学校が多かった。これら視聴覚機器の設置状況について、小規模校と中・大規模校間に差があるか否かを検討した結果、両者間に有意な差は認められなかった。したがって、視聴覚機器は学校規模とかわりなく、OHP、スライド映写機、VTR、16ミリ映写機の

順に普及していることが理解できた。

では、上記4種類の視聴覚機器は、被服領域の指導においてどの程度利用されているであろうか。設置されていると回答したものについて、その利用状況を5段階評定によって求め、結果を表2に示した。

表2 視聴覚機器の利用状況

視聴覚機器	小規模校		中・大規模校		検定
	Av	SD	Av	SD	
O H P	2.97	1.44	3.82	1.21	※※
スライド映写機	2.20	1.44	3.12	1.49	※※
V T R	1.72	1.27	1.80	0.98	
16ミリ映写機	1.40	0.96	1.54	1.21	

※※… $P < 0.01$

得点が高くよく利用されているのは、学校規模に関係なく、OHP、スライド映写機、VTR、16ミリ映写機の順であった。これは、設置状況と同順位であった。また、全体的にみると、小規模校より中・大規模校の利用度が高いようである。学校規模によって視聴覚機器の利用状況に差異があるかどうか調べた結果、OHPとスライド映写機については1%水準で有意差があり、共に中・大規模校の方が上まわっていた。

その理由の1つとして、技術・家庭科の授業を編成している学級の数が多いので、人数の多い中・大規模校では、OHPやスライド映写機をよく利用して指導方法を工夫しているものと思われる。

②被服室の設備

次に、被服の授業が支障なく行われているかどうかをみるために、学校の被服室に備えられている机・いす、ミシンおよびアイロンの数を調べた。

表3 被服室の設備 (%)

設備	学校規模	適切 である	や 不足する	や たいへん 不足する	検定
机・いす	小規模校	54.5	25.0	20.5	※
	中・大規模校	29.8	48.9	21.3	
ミシン	小規模校	54.5	27.3	18.2	※※
	中・大規模校	18.7	64.6	16.7	
アイロン	小規模校	56.8	36.4	6.8	
	中・大規模校	47.9	37.5	14.6	

※※… $P < 0.01$ ※… $P < 0.05$

表3より、机・いすの数についてみると、小規模校では過半数のものが「適切である」と答えているのに対して

し、中・大規模校では1/3にも満たない。ミシンの数については、小規模校では半数以上のものが「適切である」と答えていたが、中・大規模校では1/3にもおよばず、「やや不足する」とするものが%を占めていた。アイロンの数についても、小規模校では同様な傾向がみられたが、中・大規模校では逆の傾向を示した。したがって、小規模校では、机・いす、ミシンおよびアイロンのいずれについても過半数のものが適切とみなしているのに対し、中・大規模校ではアイロンについてのみで、他は不足するものがかなり多いといえる。小規模校と中・大規模校間に数の上で差があるか否かをみるため、有意差の検定を行ったところ、ミシンの数については1%水準で、机・いすの数については5%水準でそれぞれ有意差が認められた。

ところで、わが国では義務教育費国庫負担法に基づいて、義務教育諸学校における教材の整備充実が図られており、学校の規模に応じて標準的に必要とされる教材の数量が設定されている。この基準によって、例えばミシン及び附属品の数量をみると、5学級以下の中学校では「10」、6学級以上では「19」と表記されている。

そこで、この基準に基づいて、本調査の学校規模別にミシン1台あたりの人数を求めると、小規模校で1.4人、中・大規模校で1.7人となり、共に約2人に1台の割合でミシンが確保されることになる。

参考までに、松江市のA中学校のミシン台数を紹介してみよう。この中学校は、中・大規模校に属し、1学級36人で編成されていた。設置されているミシンは11台であったが、実際に利用されていたのはこの中の8台であり、ミシン1台あたりの人数は4.5人であった。これは標準以下の状態であり、実際に設備の充実している学校は、それほど多くないようである。

このように、数量のみでなく性能も重要な要因となるので、設備の充実にあたっては、質と量の2面から十分検討される必要がある。

では、ここで調査された各校のミシンとアイロンの性能はどうであろうか。これに対する回答を5段階評定で

表4 ミシンとアイロンの性能 (%)

回 答	ミ シ ン	アイロ ン
たいへん良い	1.1	16.3
や や 良 い	10.9	12.0
ふ つ う	30.4	59.3
や や 悪 い	41.3	10.9
たいへん悪い	16.3	1.1

求めた。なお、学校規模別に集計したところ、両者の間には有意差が認められなかったため、これを一括して検討した。

表4より、ミシンの性能の実状をみると、「たいへん悪い」と「やや悪い」とするものを合計すると、過半数を占めているのに対し、「たいへん良い」と「やや良い」と判定するものは、かなり少なかった。したがって、仮に数としてはそろっていたとしても、性能の面で大きな障害が認められることになる。

ところで、被服領域の内容構成からみて、ミシンはかなりウェイトの高い設備である。ミシンがこのような状況であれば、授業の進度などかなりの影響があるものと考えられる。早急な改善をする必要がある。

アイロンの性能については、「たいへん良い」と「やや良い」を合わせると約1/4であり、これに「ふつう」と判定したものを加えると約3/4になり、ミシンの場合と比較すると、かなり良い状況にあるといえる。

③被服室

被服領域を指導する際、被服室自体に問題はないであろうか。この問題を明らかにするため、被服室の有無と広さについて調査を行った。

実習室の有無の実態は、表5に示される通りである。

表5 実習室の有無

実習室の状況	小規模校		中・大規模校	
	学校数	割合(%)	学校数	割合(%)
㊦、㊧がそれぞれある	32	72.8	46	95.8
㊦だけある	2	4.5	1	2.1
㊧だけある	4	9.1	0	0
㊦と㊧を兼用している	4	9.1	1	2.1
㊦も㊧もない	2	4.5	0	0
計	44	100.0	48	100.0

㊦…被服室 ㊧…調理室

中・大規模校では、ほとんどの中学校に被服室と調理室がともにあり、この点は問題ない。しかし、小規模校についてみると、全体の割合では被服室と調理室のそれぞれある学校が多いものの、被服室はあるが調理室はない学校が2校、逆に調理室はあるが被服室はない学校が4校あり、さらに被服室も調理室もないところが2校あった。生徒による実習や実験などの体験を重視する技術・家庭科では、施設・設備の充実度が授業の成否を決定するといっても過言ではないであろう。今日に至るまで、被服室や調理室が設置されていないというのは、驚

くべき事実である。早急に設置が望まれる。

被服領域の中心的な内容となっている被服製作は、裁断やしるしつけなどの過程でかなり広いスペースを要する。それゆえ、被服室の有無だけでなく、その広さについても問われなければならない。

小規模校では、被服室の広さを「適切である」とするものが61.4%と多かったが、中・大規模校の場合、31.3%のものだけが「適切である」としているにすぎなかった。そのため、「やや狭い」が45.8%と最も多く、「大へん狭い」とするものを合わせると、約%が狭いと答えていた。これは学校規模によって1学級の人数が異なり、平均33.9人で構成されている中・大規模校では、被服室が狭いと判定されたのであろう。しかし、被服室を広くすることは難かしいので、1学級の人数を現在のように複学級ではなく、単学級編成にするなどの方策を講ずる努力も必要であろう。

2) 授業時数

被服領域全体についてみると、実際に授業時数はどのくらいであろうか。このことについては、〔被服1〕、〔被服2〕および〔被服3〕の各領域別にそれぞれ調査した。

実際に授業できる平均時数を求めると、〔被服1〕30.5時間、〔被服2〕26.4時間、〔被服3〕31.2時間であり、〔被服1〕と〔被服3〕に比べて、〔被服2〕はやや少なく編成されていた。

これらの授業時数は、年間の授業計画の中で配分されており、また学校行事などによって、技術・家庭科の授業の欠けることが、「よくある」と「時々ある」と答えているのが約70%あることを考えると、最大限の時間配分であろう。

では、被服領域の指導をする場合、これらの授業時数で適当なであろうか。〔被服1〕～〔被服3〕の授業時数が適当か否かについて、回答を5段階評定で求め、学校規模別に集計した。

表6 授業時数の適否 (%)

回 答	被 服 1		被 服 2		被 服 3	
	小規模校	中・大規模校	小規模校	中・大規模校	小規模校	中・大規模校
たいへん不足する	6.8	31.3	0	6.3	11.4	8.3
やや不足する	47.7	50.0	40.9	45.8	47.7	58.3
適当である	43.2	16.7	45.5	37.5	31.8	27.1
やや余る	0	0	6.8	2.1	0	0
たいへん余る	0	0	0	0	0	0
無 答	2.3	2.0	6.8	8.3	9.1	6.8

表6の結果より、どの領域についても「やや不足する」という割合が最も多く、これに「たいへん不足する」を加えると、〔被服2〕の小規模校を除いて半数以上が不足していることになる。中でも〔被服1〕の場合、中・大規模校では80%以上が不足していた。そのため、「適当である」とするものは、〔被服2〕において最も多く、〔被服1〕の中・大規模校では少なかった。また、学校規模別にみると、〔被服1〕～〔被服3〕のすべてに関して、小規模校より中・大規模校の方が授業時数が不足しているとみなされていた。特に、〔被服1〕については両者に有意差が認められ、中・大規模校の授業時数不足は深刻なようである。これは生徒にとって、内容の理解が十分でにくいというきわめて憂慮すべき事態を招くことにもなる。また、〔被服1〕は中学校段階での被服教育の導入部分に相当するので、これ以後の学習のつまづきを引き起こす原因にもなりかねない。

先に述べた実際にできる授業時数については、〔被服2〕の場合が最も少なかったが、ここで他よりもむしろ適切とみなされていることは、指導内容と生徒の発達段階との関係でより適切だと判定されたものと考えられる。授業の進度を生徒個々のペースに合わせるためにも、施設・設備の充実や指導内容の精選など総合的な視点から改善が必要であろう。

このように良い授業のためには、施設・設備の充実や十分な授業時数の保障が必要であるとともに、教師にとっては、教材研究が可能かどうか大きな課題となる。

そこで、被服領域の教材研究時間があるか否かについてみると、「あまりない」と答えているものが過半数を占め、最も多かった。「じゅうぶんある」と「まあまあある」を合わせてあると答えているものは、約%にすぎなかった。

以上のように、時間的な要素については、授業時数も教材研究の時間もともに不十分であり、改善の余地が大である。

3) 指導内容

学習指導要領に示されている被服領域の指導内容の量と程度について、適当か否かを調査した。〔被服1〕～〔被服3〕のそれぞれについて、5段階評定によって把握した。

結果は、表7と表8に示される通りである。

まず指導内容の量についてみると、〔被服1〕の場合の中・大規模校を除いて、その他では「適当である」とみなすものが半数以上を占め、最も多かった。次に多いのは、量を「やや多い」とするもので、約%であった。

このように、現行の指導内容はおおむね適当とみなさ

表7 指導内容の量 (%)

回 答	被 服 1		被 服 2		被 服 3	
	小規模校	中・大規模校	小規模校	中・大規模校	小規模校	中・大規模校
たいへん多い	0	8.3	0	2.1	2.3	4.2
やや多い	22.7	52.1	20.5	20.8	38.6	27.1
適当である	72.7	33.3	68.1	64.5	50.0	60.3
やや少ない	2.3	2.1	2.3	4.2	0	0
たいへん少ない	0	0	0	0	0	0
無 答	2.3	4.2	9.1	8.4	9.1	8.4

表8 指導内容の程度 (%)

回 答	被 服 1		被 服 2		被 服 3	
	小規模校	中・大規模校	小規模校	中・大規模校	小規模校	中・大規模校
たいへん高い	0	14.6	0	0	0	0
やや高い	29.5	45.8	9.1	10.3	15.9	6.3
適当である	65.9	35.4	70.4	77.1	70.5	87.4
やや低い	2.3	0	11.4	4.2	4.5	0
たいへん低い	0	0	0	0	0	0
無 答	1.3	4.2	9.4	8.4	9.1	6.3

れているものの、中・大規模校では「被服1」を、逆に「やや多い」とするものが約半数で、「適当である」とするものは、 $\frac{1}{2}$ にとどまっていた。「被服2」と「被服3」においては、学校規模の影響はほとんどみられないが、「被服1」では明らかに異なり、学習指導要領に準拠した同一の内容であっても、人数の多い場合には、より一層の工夫が必要であることを示している。

表8より、指導内容の程度についてみると、量への反応と同様の傾向がみられ、「被服1」の中・大規模校を除いて、「適当である」とするものが最も多かった。この場合も、「被服1」についてのみ学校規模別に有意差が認められ、「やや高い」とするものが最も多く、約半数を占めていた。

以上、学習指導要領に示されている指導内容の量と程度については、特に「被服1」に関し、中・大規模校の教師が問題視していた。生徒にとって初めて被服製作に取り組む「被服1」では、指導内容がかなり精選されたとはいえ、人数が多くなると指導に困難をきたすようである。被服製作は、生徒一人ひとりが各自の課題に主体的に取り組むことを特徴とするので、その特徴を十分発揮できるよう内容の検討が強く求められている。

今回の学習指導要領の改訂によって、男子には家庭系列から1領域以上選択履修させることを義務づけられたが、女子にとっても学級人数の多い場合には、内容が難

しく量が多いとみなされている「被服1」を男子に履修させることについて、教師はどのように受けとめているであろうか。

その点を調べた結果、難しいと答えているものが半数を占めているのに、易しいとするものは14.1%にすぎず、「被服1」を男子に履修させるというのは、教師の意識からみる限りかなり困難のようである。

したがって、内容を検討する際、男女とも等しく学べるという視点を加えることが重要である。

以上のような施設・設備や指導内容などの下で、被服領域の各々について、授業の展開は容易であろうか。この点について調べたところ、学校規模別に有意差が認められなかったため、一括して検討する。

表9 授業の展開のし方 (%)

回 答	被服1	被服2	被服3
たいへん難かしい	6.6	0	1.1
やや難かしい	36.3	21.8	23.9
どちらともいえない	53.8	64.4	68.2
やや易しい	3.3	13.8	0
たいへん易しい	0	0	1.1

表9より、「被服1」～「被服3」の各々についてみると、「どちらともいえない」という判定が最も多く、半数以上となっていた。その割合は、「被服1」～「被服3」の順に多かった。次に多いのは「やや難しい」とするもので、「被服1」で約 $\frac{1}{3}$ 、「被服2」と「被服3」では約 $\frac{1}{2}$ 強であり、「たいへん難しい」については、全体的にみるとわずかであった。逆にやさしいとするものは、「被服1」が最も少なく、「被服2」が多かった。

このように、「被服1」は他よりも内容について程度が高く、量が多いと認知されているだけでなく、授業の展開のし方が最も難しく、指導が困難なことを示している。

これらの結果を総合的にみて、教師は「被服1」の指導にかなり苦慮していることが浮き彫りにされた。

このような事態に対処するため、教師は指導内容や方法の創意工夫が求められている。これに応えるには、教師はまず生徒の実態に即応した教材の選定を、自主的にできなければならない。現在、教師はどのような状況にあるだろうか。

この点について調査したところ、全体的にみて「被服2」と「被服3」の割合は類似した傾向を示し、半数のものは「どちらともいえない」、約 $\frac{1}{2}$ のものが「難かし

い」としているが、「被服1」とは異なっていた。すなわち、「被服1」について教材の選定を自主的に行うことが難しいとするものが半数を越え、やさしいとするものは10%にも満たなかった。

こういったことから、「被服1」は教師にとって、指導上の障害があまりにも多いといえるであろう。

2 着装的指導

1) 着装的指導上の諸問題

家庭科教師が、被服領域の着装について指導する際、どのような点が障害となっているのかを把握するため、被服領域全体を検討したように、授業を成立させるために必要な次のような観点から質問項目を設け調査した。

すなわち、学習指導要領に示された着装に関する指導内容の量、程度や時間配分が適当か否か。また、教材研究のあり方や、実際の授業において展開のし方や生徒が興味関心を持つよう指導するに困難はないか、などである。

結果は、図1に示す通りである。

図1 着装的指導上の諸問題 (%)

指導内容の量	たいへん多い 2.2	やや多い 28.3	適当 52.2	やや少ない 14.1	たいへん少ない 3.3
指導内容の程度	やや高い 17.4	適当 68.5	やや低い 9.8	たいへん低い 2.2	無答 2.2
授業時数	たいへん不足する 16.3	やや不足する 51.1	適当 25.0	やや余る 3.3	無答 4.3
教材研究の時間	全くない 9.8	あまりない 65.2	適当 7.6	まあまあある 15.2	無答 2.2
教材・教具の考案 や創意工夫	たいへん難しい 1.3	やや難しい 50.0	どちらとも いえない 35.9	やや易しい 1.1	たいへん易しい 1.1
授業の展開のし方	たいへん難しい 2.2	やや難しい 33.7	どちらとも いえない 54.3	やや易しい 4.3	無答 5.4
生徒に興味・関心 をもたせる指導	たいへん難しい 3.4	やや難しい 33.7	どちらとも いえない 38.0	やや易しい 17.4	たいへん易しい 1.1
					無答 4.3

まず着装に関して、学習指導要領に示されている内容についてみると、その量を「適当」と考えているものが最も多く、過半数を占めていた。「やや多い」とするものはこれに次いだが、「やや少ない」とみなすものは、その半分にすぎず、「たいへん多い」と「たいへん少ない」とするものは、わずか2~3%であった。また、程度については、「適当」とするものが約70%を占めていた。着装は「被服2」に含まれるので、「被服2」と同様の傾向が得られたことになる。

これらの結果から、現行の学習指導要領に示されてい

る着装的指導内容の量と程度は、共に半数以上のものが適当だと考えており、着装独自の大きな問題点はうかがえなかった。しかし一方で、指導内容の量を「多い」とするものが約1/3、程度を「やや高い」とするものが約1/6を占めていることは見逃せない。これらに対しては、授業時数を十分とったり、教材を工夫するなど指導上きめ細かい配慮が求められるであろう。

では、着装的授業時数に問題はないであろうか。このことを明らかにするため、授業時数への反応をみると、「やや不足する」というのが半分あり、これに「たいへん不足する」という割合を含めると、約70%に達し、「適当」とみなすものを大幅に上まわっていた。「被服2」における反応より、不足するというものがかなり多く、時数不足のしわ寄せが着装に生じているものと思われる。したがって、授業時数の不足は指導上の大きな障害になっているものと思われる。

良い授業は、十分な教材研究に裏づけられてこそ成立するものである。着装的教材研究時間については、「あまりない」「全くない」の両者を合わせると、約20%のものが教材研究時間の不足を訴えている。被服領域全体よりも不足の状態が大で、良い授業の実践という点では深刻な事態をきたしているといえる。

また、教材・教具の考案や創意工夫については、「やや難しい」「たいへん難しい」というように、難しいとするものが半数を越えていた。これに対して、「やや易しい」と「たいへん易しい」とみなすものをあわせても10%に満たない。このように、着装的教材研究は、時間的にも内容的にもかなり困難な状況にある。したがって、これではとうてい良い授業は望めないで、今後着装的指導に対して、特に教師の積極的な取り組みが期待される。

このような状況のもとで、果して授業の展開のし方は容易であろうか。これに対する回答は、「どちらともいえない」というのが約半分で、授業の展開のし方は、難しくも易しくもなくどちらともいえないという意見が一番多いが、一方で難しいと答えているものが約40%以上もいることは注目すべきであろう。同じく着装的授業で、生徒が興味・関心を示すように指導することは、「たいへん難しい」と「やや難しい」を合わせて難しいとする割合が、「どちらともいえない」とする割合とほぼ同じでそれぞれ40%弱づつであった。

これらの結果から、着装について授業をするとすると、展開が困難でしかも生徒が興味・関心をもって学習するような指導に苦慮している実態がうかがえた。

授業時数や教材研究のし方に問題がみられたのは、被

服教育が伝統的に被服製作を中心にして展開され、他の内容にはほとんど重点がおかれてこなかったことの結果であろう。それゆえ、被服領域全体の中で、着装の指導をどのように位置づけるかが議論されねばならない。

2) 着装の指導実態

技術・家庭科において着装がどのように指導されているのかを明らかにするため、位置づけ、授業時数、指導方法と指導内容の4つの観点から実態を調査した。指導方法と指導内容については、複数回答を求めた。

①位置づけ

着装の指導を被服領域の中でどのように位置づけているのかは、表10に示した。

表10 現在の位置づけ (%)

位 置 づ け	割 合
特別に時間を設けて着装の指導をしている	5.4
被服製作の過程を通して着装の指導をしている	80.4
着装の指導はしていない	13.1
その他	1.1

これによると、「被服製作の過程を通して指導する」という意見が大部分を占めていた。これに対し、「特別に時間を設けて指導する」というのは、約5%できわめて少なかった。「着装の指導はしていない」というものもあり、約13%であった。

このように着装の指導は、学習指導要領に示されている「製作を通して……」という位置づけのもとに行っており、被服製作の過程と切り離して特別に時間を設けた指導は、ほとんどなされていなかった。したがって、多くの教師は、学習指導要領に示されていることにおおむね従って、不十分な位置づけのまま指導していることが理解できた。

②授業時数

着装について、「被服製作の過程を通して指導する」「時間を設けて指導する」と回答したものに対してのみ、何時間着装の指導をしているのかを尋ねた。

その結果、「1時間未満」が約24%、「1時間」が約53%、「2時間」が19%であり、「3時間」以上になると2~3%と極めてわずかであった。位置づけを明らかにした調査において、何らかの形態で着装の指導をしていると答えたもののうち、「1時間未満」と「1時間」を合計すると、約¾のものが1時間以内で指導しているにすぎなかった。「被服製作の過程を通して……」という位置づけで、しかも授業時数も1時間程度であれば、十分な指導はできないはずである。現状では、着装の指導に

それほど重点が置かれていない。

③指導方法

指導方法についても、指導をしていると答えたもののみを対象に調査した。

表11 現在の指導方法 (%)

指 導 方 法	割 合
ことばだけの説明での指導	60.1
具体的な資料を示しての指導	49.1
実習・実験を通しての指導	30.4
その他、独自のものを使っての指導	5.1

表11より、割合の多い順に並べてみると、「ことばだけの説明での指導」、「具体的な資料を示しての指導」、「実験・実習を通しての指導」という順序であり、「その他独自のものを使っての指導」をしているものは、約5%にすぎなかった。

このようにことばだけの説明ですませているものが最も多く、着装の指導はどのような方法であれ、指導したか否かに注目して形式的になされる傾向にある。やはり、教材研究の時間が少なく、しかも内容的に難しいという実状を反映したものであろう。しかし、単にことばだけで教師が一方的に説明していたのでは、生徒は興味・関心をもてないし、学習効果を期待できない。若干ではあるが、シートを作成してOHPで示したり、作品製作後その作品のスナップ写真を利用するなど、教材工夫のみられるケースがあるので、実験実習を取り入れるなど指導上の工夫は十分可能である。

④指導内容

着装として、具体的にどのような内容が指導されているであろうか。指導内容として、被服の機能と構成要素の2側面からとらえた。

まず、被服の機能という観点からみると、表12に示されているように、「目的・用途にあった着装」を指導しているものが最も多く、次いで「日常着の組み合わせ

表12 現在の指導内容（被服の機能） (%)

指 導 内 容	割 合
日常着の組み合わせ方	72.2
流行現象	16.2
季節にあった着装	49.4
目的・用途にあった着装	81.0
個性を生かした着装	32.9
その他	1.3

方」で、大部分のものが指導していた。これに「季節にあった着装」、「個性を生かした着装」と続いたが、「流行現象」については、16.2%と少なかった。

ところで、中学生の衣生活認識の特徴は、宮川・岩本両氏の調査によると、小学生と比較して、習慣や社会生活の中で衣服の役割、自己を表現する手段として衣服を重視するようになり、日常着においても自分によく似合うもの、色彩のよいものと個性面に選択の重点が移行することを明らかにしている。

中学生の衣生活認識の発達と今回の調査結果を対応させてみると、着装の指導は中学生の衣生活認識をある程度ふまえた方向でなされているといえる。

このように、中学生の衣生活認識の発達を十分熟知し、その発達を促進するような指導内容を設定する必要がある。

被服の構成要素の側面から指導内容をみると、表13に示されるように、「デザイン」「素材」「色彩」について指導しているのが大部分であった。構成要素という観点から指導内容をみた場合、「デザイン」「素材」「色彩」のうち、特にどれに重点をおくというのではなく、同じような比重で指導されていると理解できる。

表13 現在の指導内容
(被服の構成要素) (%)

指 導 内 容	割 合
デ ザ イ ン	65.8
色 彩	55.6
素 材	65.8
そ の 他	2.5

3) 今後の着装の指導

家庭科教師が、今後中学校において着装の指導をどのように行えばよいと考えているのかを、現在の着装の指導実態を明らかにしたと同様に、4つの観点から明らかにした。

①位置づけ

表14 今後の位置づけ (%)

位 置 づ け	割 合
特別に時間を設けて着装の指導をする	7.6
被服製作の過程を通して着装の指導をする	79.3
着装の指導はしない	6.5
そ の 他	6.6

表14に示されているように、「被服製作の過程を通して指導する」という意見が大部分を占め、「特別に時間を設けて指導する」という積極的なものは、約8%にすぎなかった。「特に着装の指導はしない」という否定的なものも、わずかではあるがみられた。着装の指導については、今後も学習指導要領に示されているように、製作の過程を通して行ったほうがよいというものが4%以上を占め、引続き現行の学習指導要領にそって指導していかうとする態度が強くなり得る。

現在と今後において、位置づけをどのように考えているのかの関連性を分割係数によって求めると、 $p=0.81$ となり、両者の連関は極めて強いといえる。つまり、現在「特に時間を設けて指導している」ものは、今後も「特別に時間を設けて指導する」と答え、「被服製作の過程を通して指導している」ものは、今後も同様に指導すると答えていることになる。したがって、現状維持の傾向が強くなり、ほとんどの教師は被服教育を新しい視点より改善しようとする積極的な態度を示していない。

しかし、現在「特に着装の指導はしていない」けれど、今後は「被服製作の過程を通して指導する」のがよいと答えているものが4名、「被服製作の過程を通して着装の指導をしている」が、今後は「特別に時間を設けて着装の指導をする」というものが4名みられた。このことは、今後の着装の指導について、現状よりやや明確に位置づけようとする兆しと考えられる。

②授業時数

今後着装の指導にあてたいとする授業時数の予定は、「1時間未満」が約21%、「1時間」が約46%、「2時間」が約28%となっており、1時間以内に約65%、2時間以内に90%が集中していた。そのため、3時間以上はわずか数%であった。

現在と今後にあてたいとする授業時数の関連性を分割係数によって求めると、 $p=0.89$ となり両者の連関が極めて強かった。大部分の教師は着装の指導を、今後も引続き製作の過程を通してという位置づけで、授業時数も1時間程度であればよいと考えていることになる。

このように、現在と今後の着装の位置づけと授業時数は連動して、やはり位置づけが明確に規定されなければ限られた中で、授業時数を増加させることは困難のようである。

③指導方法

着装について、今後どのような方法で指導しようとしているであろうか。その結果は表15に示される通り、「具体的な資料を示して指導する」ものが最も多く、次に「実験・実習を通して指導する」、「ことばだけの説明

表15 今後の指導方法 (%)

指 導 方 法	割 合
ことばだけの説明での指導	8.9
具体的な資料を示しての指導	89.9
実習・実験を通しての指導	44.3
その他、独自のものを使っての指導	3.8

で指導する」、「その他独自のものを使って指導する」という順であった。現在、どのような方法で着装の指導をしているかという調査においては、「ことばだけの説明で指導している」という回答が最も多かったが、今後の指導としてその方法は激減し、かわって具体的な資料を示したり、実験などを通して指導しようとする傾向が強くなりみられた。

指導方法について、現在と今後の関連性をみるため相関係数を求めると、 $p=0.56$ となりそれほど連関は強くなかった。このように、現在の指導方法を改善しようとする意欲的な態度がみられるのは、望ましいことである。今後の授業に生かされるよう期待したい。

④指導内容

着装について、今後どのような内容を指導しようとするのか被服の機能面からみた結果を、表16に示した。

表16 今後の指導内容（被服の機能） (%)

指 導 内 容	割 合
日常着の組み合わせ方	73.4
流行現象	18.9
季節にあった着装	55.7
目的・用途にあった着装	91.1
個性を生かした着装	59.5
その他	1.3

「目的・用途に応じた着装」について指導するというものが最も多く、次いで「日常着の組み合わせ方」、「個性を生かした着装」、「流行現象」の順であった。「流行現象」については、他の内容に比べて割合が非常に低くなっている。この要因として、流行現象については、学生服を中心に着用している中学生にとって、指導しにくい内容であることや、この段階で必ずしも指導を必要としないことなどが考えられる。

これらの結果を、現在指導されている内容と比較すると、今後指導したいとするものが全部について増加し、多様な角度から指導しようとしていることがわかる。中でも、「個性を生かした着装」については2倍近く増加

し、この点に一層力を入れて指導していこうとする傾向がうかがえた。しかし、ひと口に個性を生かした着装について指導すると言っても、生徒一人ひとりの生活にかかわる個人的な問題とも関連するので、客観的な立場で指導するのは困難が伴うと思われる。したがって、どのように指導すればよいのか、指導方法とあわせて十分検討される必要がある。

被服の構成要素という観点から指導内容をとらえた場合、表17に示すように、「デザイン」と「素材」について指導するというのが、ほぼ同じ割合で大部分を占めた。「色彩」については、これよりやや少なかった。現在指導している内容と比較すると、どの内容についてもやや増加しており、現在の指導内容を肯定し一層多様な観点から指導が意図されている。

表17 今後の指導内容（被服の構成要素） (%)

指 導 内 容	割 合
デ ザ イ ン	72.2
色 彩	61.1
素 材	76.9
そ の 他	2.5

IV. 要 約

中学校技術・家庭科の被服領域は、学習指導上解決すべきさまざまな課題を抱えており、その一つが内容の改善である。内容改善の視点として、被服製作中心から脱脚して、いかに着るかに関わる着装の指導を重視することが考えられる。この視点からの改善の方策を探るため、中学校の家庭科教師を対象にアンケート調査を実施し、着装の指導に重点をおいて被服領域全体の指導上の問題点を調べ、被服領域におけるその望ましい指導のあり方を検討した。

得られた結果は次の通りである。

1 被服領域指導のための施設・設備は、生徒による主体的な学習活動を重視するには十分整えられているとはいえず、一層の整備が望まれる。

2 授業時数についてみると、被服領域にかなり配分がなされていたが、不足するという割合が最も多かった。そしてそのしわ寄せが、着装の指導などに及ぼしていると考えられ、位置づけのあいまいさとも重なりあって、着装の指導には1時間程度あてられているにすぎなかった。着装の指導の充実には、まず明確な位置づけが求められる。

3 指導内容の量や程度については、それほど障害があるとはみなされてはいなかったが、男子の履修は困難だというのが大部分の教師の考えであった。男女とも学べる内容の設定を検討される必要がある。

4 教材研究時間は、全体的にあまり確保されていないが、特に着装については、大部分のものが時間不足を訴えていた。また、教材・教具の創意工夫が難しいとされているので、時間的にも内容的にも困難な状況にあり、授業の展開に苦慮していた。したがって、生徒が興味・関心を持って学習に取り組めるような授業の実践は、難しいといえよう。今後、着装の指導に対して教師の積極的な取り組みが期待される。

5 着装について具体的な指導内容は、被服の機能の観点からみると、「目的や用途にあった着装」や「日常着の組み合わせ方」を重視し、被服の構成要素としては「デザイン」「素材」や「色彩」が中心であった。そして、今後も引続いてこれらに重点をおいて指導するという傾向がみられた。指導方法については、今後ことばだけの説明から、具体的な資料や実験などを通してより具体的に指導しようとする態度がみられ、着装の指導改善の兆がうかがえた。

被服領域において、さまざまな問題点が指摘されているにもかかわらず、本調査からみる限り現状維持の傾向が強く、新しい視点からの改善の試みが積極的になされる必要があろう。

本研究を終えるにあたり、調査にご協力いただいた技術・家庭科の先生方に厚く御礼申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 小川安朗：体系被服学，光生館，8（1971）
- 2) 文部省：(新) 中学校学習指導要領 80（1981）
- 3) 長谷川圭子：家庭科教育57，(13)，37（1983）
- 4) 武市成子：家庭科教育51，(5)，106（1977）
- 5) 武井洋子：日本家庭科教育学会誌18，13（1976）
- 6) 文部広報：第760号（1983）
- 7) 宮川満，岩本祥子：家庭科教育 57，(12)，22（1983）